

「現地を訪問して思うこと」

岩手県コース参加 2008年 政策科学部卒業 近藤 佳苗

あの大地震から三年が経った。気になってはいたが、なかなか訪れることのできなかつた被災地によろやく訪問できた。報道された映像や、新聞記事などで得ることのできる情報ではなく、実際に自分の目で現地を確認してみたかったというのが今回参加した理由だ。三年が経ち、復興状況も気になっていた。

実際に訪問してみると、被災地では津波で押し寄せた瓦礫がきれいに片付けられ、なくなっていた。しかし、以前は街の中心部で、人々がそれぞれの生活を営み、にぎわいのある商店が連なっていた所は津波でさらわれ、かつて駅があった場所、線路が引かれていたところ、それらも跡が残るのみだった。津波でひしゃげてしまったフェンス、家の基礎跡、津波が襲ってきたであろう時間で止まったままの壁時計。瓦礫はなくなっても、震災を感じさせるものがあちこちに残っていた。復興にはまだ時間がかかりそうだと感じた。

今回の大地震では津波で多くの方が亡くなった。現地の方から聞いた震災体験談の中で一番印象に残ったのは、「津波てんでんこ」という古くからその地域で言い伝えられてきた言葉だった。これは津波から避難する方法を表しており、津波が起こった場合、家族の人や周りの人が逃げているかどうかを確認せず、まずは自分の身を守るため高いところへ自主的に避難するというを言い表しているようだ。三陸地方では昔から津波が多かったそうで、このような昔の経験が語り継がれており、実際に今回の震災で避難するときに役立つ面もあったようだ。しかし一方で、一部ではこの経験も風化し、また新しくこの地に住み始めた人には昔の経験は伝わらず、逃げ遅れた人も多くいるようだった。

これを受けて、津波から逃げる方法は全国で共有した方がいいのではないかと思った。なぜなら、私の出身県は海に面しているが、あまり地震がないため、学校での地震訓練では津波から逃げる方法などは習わなかった。習った内容は、「机の下に隠れ、揺れが収まったら建物から避難する」という方法だけだった。今回の話を聞いていなかったら、実際に津波が来た場合、私は咄嗟に動けない気がした。現在では、生まれた地にとずっと住み続ける人はそう多くはなく、仕事や進学の都合で全国各地に移動する方が多いと思う。日本は地震大国のため、いつ・どこで地震に合うかはわからない。一人でも多くの方が助かるためにもこのような避難方法は共有した方がいいと思った。

今回、岩手県校友の方や現地の方の協力のおかげで、訪問して様々なことを感じ、学ぶことができた。震災前の状態になるにはもう少し時間がかかりそうだが、岩手県には山姿が美しい岩手山や、気持ちのいいドライブが楽しめる八幡平、世界遺産の中尊寺金色堂がある平泉など、観光要素が多い。ぜひ多くの方にお越しいただいて、復興が早く進んでほしいと思った。